沖縄西表島祖納方言

—アスペクト・テンス・ムード体系の素描

金田章宏

要旨

西表島祖納方言の動詞には、アスペクト・テンス・ムードにかかわる形式として、ヌムン形・ヌミ ス形、ヌミ ブ形、ヌミル・ヌミドゥル形、ヌメル・ヌミダル形、ヌミ ブレル形があり、それぞれ部分的にかさなりながらも、独自の意味用法をもつ。本稿ではこのうちヌミル・ヌミドゥル形、ヌメル・ヌミダル形、ヌミ ブレル形について概要を記述した。ヌミル・ヌミドゥル形は、ヌミ ブ形が現在の状態に注目して動作などが進行中であることを主としてあらわすのに対し、過去にはじまった動作などが現在も継続していることを主としてあらわす。ヌメル・ヌミダル形とヌミ ブレル形はのこされた記録や痕跡、効力などをもとにした推論に主として使用されるが、前者がより断定、確定的であるのに対し、後者はより不確実、不確定的である。また、過去だけでなく未来の反実仮想の意味にも使用される。

1. はじめに

西表島は沖縄県八重山郡竹富町にある、沖縄本島につぐ大きな島であるが、人口は2300人ほど、なかでも本稿でとりあげる祖納(そない)地区は160人ほどで、おなじ方言が使用されるとなりの干立(ほしたて)地区とあわせても方言人口はごく少ない。竹富町にはおもな有人の島が6つあるが、音声・音韻の点でも文法の点でもその方言差は大きく、それぞれたがいに通じにくいほどである。

本稿では動詞のおもにアスペクトにかかわるいくつかの派生形式——ヌミル・ヌミドゥル形[1]、ヌメル・ヌミダル形[2]、ヌミブレル形——をとりあげる。この方言の完成相相当形式(スルに対応するヌムン形・ヌミ ス形)と分析的な継続相相当形式(シテイルに対応するヌミ ブ形)にも、アスペクト・テンス・ムードの点でいくつかの特徴がみられる。しかし、それ以上に特徴的なのが、標準語には存在せず、琉球諸方言にさまざまなバリエーションであらわれるこうしたいくつかの形式である。筆者はこの地区の方言文法全体の記述をめざしているが、紙幅の都合もあり、本稿では後者に範囲をしぼって記述することとしたい。

本稿でふれない諸形式について、全体の理解のためにここでかんたんにふれておく。動作や変化をまるごとの姿でさしだす完成相相当形式にはヌムン形・ヌミ ス形がある。ヌミ ス形はヌムン形の中止形とサ変のスとの組み合わせからなるもので、ヌムン形がムードの点でより中立的なのに対して、ヌミス形はより強調的に使用される。また、先手発言か受け手発言かによる違いもみられる。継続相相当形式には中止形とヲリとの組み合わせからなるヌミ ブ形があり、標準語のシテ イルとおなじような意味で使用されるが、この方言のほかの派生形式との関係もあって、標準語と比較すると、動作動詞では動作パーフェクトをあらわしにくいし、変化動詞のばあいもより変化の継続をあらわしやすく、より変化の結果の継続をあらわしにくい。また、アリ ブ、ブリ ブのように存在動詞からもつくられる。

例文の表記については、母音の無声化は！を使用して、また、アクセントまたはイントネーションの高低を」(下降)と「(上昇)で、花：「パ！ナ「ドゥ、鼻：」パ！ナ」ドゥ、端：「パ！シ」ドゥ、橋：」パ！シ「ドゥ、箸：「パ」シ」ドゥのようにしめす。

2. ヌミル・ヌミドゥル形

ヌミル形は中止形ヌミと存在動詞ヲリとの融合に由来するとみられるもので、中止形ヌミに強調辞のドゥが付属してヲリが融合したとみられるのがヌミドゥル形である。それぞれの過去形はヌミダ、ヌミドゥダとなる。この形はアットゥル、ブットゥルのように存在動詞からもつくられる。

この形式は、ヌミ ブ形が現在のさまざまな継続を基本的にあらわすのとことなり、過去(相対的なテンスでは以前)にも視点をむけていて、動作の開始後の継続をあらわすことを基本とする。また、反復習慣などの意味でも使用される。

なお、本稿でとりあげる他の形式にも同様にいえることだが、非過去形に終助辞などがつくとヌミドゥルなどのルが脱落してヌミドゥヨのようになりやすい。

2.1. 非過去形

未来テンスでは、未来の変化の結果の継続や反復習慣、存在をあらわす。変化の結果の継続では、基準時(波線)以前に述語のしめす変化が完成し、基準時の段階でそのあとの継続状態にあることをあらわす。

また、反復習慣では未来のある時点から動作やできごとなどの反復や習慣がはじまることをあらわす。存在では人やもの、できごとなどが未来に存在することをあらわす。

(1) ライ」シューノ 「ミナ」グルメ 「バー」 ミャー ナ「ハナ」 イ「ヒ」ドゥルヨ。
来週の今ごろは私、もう那覇に行っているよ。 (変化後)

(2) ア「ツァヌ」 ピ！サングル」マデ「ナ シ！ニドゥル」ヨ。
あしたの昼ごろまでに死んでいるよ。(この金魚、だいぶ弱っているから。) (変化後)

(3) ヤイ」ラ ジューガ「ツナ」 ウンドー「カイ アットゥ」ル「ラー。
来年から10月に運動会があるよ。 (反復習慣)

(4) クゥナ」 ブットゥル。
ここにいるよ。(あしたから毎日ここにいる？に答えて、いることを強調する。) (反復習慣)

(5) ア「ツァ」 ガッ「コナ」 ウンドー「カイ アットゥ」ル「ラー。
あした学校で運動会があるよ。 (できごとの存在)

現在テンスでは、発話時＝現在を基準時とし、現在が動作の開始後、あるいは変化後であることに注目して、その動作や変化の結果が継続していることをあらわす。そのばあいの継続は、具体的な動作が継続していることもあれば、断続的であることもある。

（6） キヌ」 ブシ！「ティ」ラ 「ヨ キ！トゥ」ルヨ。
きのうおとといからね、来ているよ。（1日1回のバスがここ1週間ほど休んでいて、さいきんバス来ないね、という人に対して、もうちゃんと来はじめているよ、と教える。）

（7） ノーシ！「トゥ」ル。
直している。（すでに仕事に取りかかっている。いま現在は直す作業をしていなくてもいい。）

（8） タロー」 ア「レードゥ」ル。
太郎が洗いはじめている。

（9） アミ」 フイ「ドゥ」ル。
雨が降っている。（さっきまで降っていなかったのに、戸を開けてみたらわかった。）

ヌミ ブ形と比較してみよう。はじめのヌミ ブ形では単なる現在の状態をあらわしているのに対して、あとの例では〈以前は落ちていなかった〉ことを積極的にあらわしている。

（10） マナ」 ウ「ティ」 ブ。
そこに落ちている。

（11） マナ」 ウティ「ドゥ」ル。
そこに落ちている。

開始後であることにモーダルな意味をともなうことがある。つぎの例で、ヌミ ブ形では単にケガをして病院にいることをあらわすが、ヌミドゥル形だと、行く必要などないのに、というニュアンスが強くなる。

（12） ミナ」 ビョー「インナ イヒ」ブ。
いま病院に行っている。（さっきかなりのケガをして。）

（13） ミナ」 ビョー「インナ イヒ」ドゥル。
いま病院に行っている。（さっき軽いケガをして。）

パーフェクトの用法では、過去のできごとの痕跡などをもとに推論したり、記録からそのできごとを確認したりする。ただし、この意味を積極的にあらわすのは、つぎのヌメル・ヌミダル形である。

（14） タ「ロー」 キ！「トゥ」ルリャン「ラ」ー。
太郎が来ていたんだねえ。（太郎はもういないが、お土産などで来たことがわかる。）

（15） ク！ヌ ピ！シメ ク！ムリ「ドゥ」ル。
この日は曇っている。（記録を見て。）

非過去形ではまた、動作、変化、変化の結果の、単なる継続をあらわす。

（16） ヌミ「ドゥ」ル「ラ」ー。
飲んでいるねえ。（飲んでいるのを見ながら。）

（17） ウヌ ヤー「ドゥ」 アヒドゥル。
あの戸が開いている。（少しずつ動いているのを見て。）

（18） ウヌピ！トゥ ビー「ドゥ」ル。
あの人、酔っている。

つぎに、存在、反復習慣、単なる状態、脱時間の例を2例ずつあげる。

（19） オ「カー」サン ブッ「トゥ」ナ？／ハイ」 ブットゥル。
お母さんいる？／はい、いますよ。 （一時的存在）

（20） マ」ナ「アッ」トゥル。
そこにある。 （一時的存在。脱時間にも可。）

(21) タ「ローメ」 ピーン」ピン ロ「クジナ」 ヤ「ドゥ」 アヒドゥル。
太郎は毎日6時に窓を開けている。 (反復習慣)

(22) ミナ パ！テヌ」シグトゥ シ！「トゥ」ナ？／「シ！トゥ。
いま畑の仕事してる？／してる。 (反復習慣)

(23) ヨー「ガリドゥ」ル。
(あの人は)やせている。 (単なる状態)

(24) カ！シ」ヌ ムヌ「ドゥ シ！キ」ル。
(私は)こういうものが好きだ。 (単なる状態)

(25) スナ「ナ イ」ユ ブットゥル「ガ」ー。
海には魚がいるよ。 (脱時間)

(26) タイヨー「ヌ」 マーリ マーットゥル。
(地球は)太陽の周りを回っている。 (脱時間)

反実仮想の用法にはつぎのヌメル・ヌミダル形が主として使用されるが、ヌミル・ヌミダル形を使用すると、そのことに対する関心やこだわり、感情的なものがあらわれるようである。

・ホーム」ラン ウ「ツァ」ナッ「カ」ラ マ「ヒドゥル。
ホームランを打たなかったら負けていた。
・ウラ ム「チキ」ブ「レラ」 ミナ 「クゥナ」リ サ！キ ヌミ「ドゥ」ヨ。
あなたが(酒を)持ってきていたら、いまここで(その)酒を飲んでいるよ。
・タ「ローメ キュー クンスヌ キー」ブ「レラ ク！ゥナ」 ブッ「トゥガ。
太郎はきょう来ていないけど、来ていたらここにいるよ。

2.2. 過去形

過去形に基本的なのはパーフェクトの用法である。過去の基準時以前にできごとが成立し、基準時においてなんらかの結果や効力がのこっていることをあらわす。

(27) キ！ヌ」バー ミッタ バ「ショ シ！ニドゥ」ダヨ。
きのう私が見たとき、(あの魚はもうすでに)死んでいたよ。

(28) ウヌ バショ「メ」 ユミ「ドゥ」ダヨ。
あのときには(私はもうその本を)読んでいたよ。

つぎに、過去の存在、反復習慣の例をあげる。

(29) ヤ「ナナ」 ブッ「トゥ」ダヨ。
家にいたよ。(午前中ちゃんと家にいたか？ に答えて。)

(30) ア」シヌ 「パ！ナ」シ 「アットゥ」ダナ？
そういう話、あったの？

(31) ク！ヌ シンブン「ドゥ」 ミ「リ」ダ。
この新聞を見ていた。(いまはとっていないけれど、先月まではこの新聞をとっていた。)

反実仮想の例をあげる。ただし、非過去形にみられたモーダルな点については未確認。

・シグトゥヌ 「ミャナッカラ」 ヌ「ミ」ドゥダヨ。
仕事がなかったら飲んでいたよ。
・キ！ヌ」 シグトゥ「ドゥ」 アリ「キ」 イスガッ「サリキ …シグトゥヌ「ミャナブレラ」 ミ「リ」ドゥダヨ。
きのう仕事があったから、忙しかったから…仕事がなかったら(テレビを)見ていたよ。

3. ヌメル・ヌミダル形

ヌメル形は中止形ヌミと存在動詞アリとの融合に由来するとみられるもので、中止形ヌミに強調辞のドゥが付属してヲリが融合したとみられるのがヌミダル形である。それぞれの過去形はヌメダ、ヌミダダとなる。

この形式は、過去におけるなんらかのできごとに起因する痕跡や、過去の言語活動、さらには過去の記憶などをもとに、あるできごとが過去にあった(ようだ)と推論するパーフェクトの用法に使用されることを基本とする。ヌミル・ヌミドゥル形にも記録などをもとにした同様の用法がみられるが、この形式のほうがより広い範囲を推論の対象とすることができる。反実仮想にはこの形式がよく使用されるが、この用法はさきのヌミル形、ヌミ ブ形、つぎにとりあげるヌミ ブレル形にも存在する。

標準語訳では基本的に〈してある〉としたが、標準語では〈人がものを〜する〉が〈ものが〜してある〉のように、動作対象が主語になるのに対して、この形式では動作主体がそのまま主語となり、〈人がものを〜してある〉となる。この構文は標準語では準備のできた状態をあらわすのに使用されるが、この方言ではとくにそういった意味はないので、訳としては不自然なものもある。

3.1. 非過去形

未来テンスでは未来における結果の継続をあらわす。未来の基準時以前に動作や変化が終了し、基準時の段階で動作の結果生じた対象が存在していたり、変化の結果が継続していたりする。

(32) バー　ヤッ「ティ」　カ「イ」ル　ジブンメ　タロー「メ」　チャンプルー　チ！「クッタ」ルハズ。
私が家に帰るころは、太郎はチャンプルーを作ってあると思う。

(33) ミナ　ピ！シ」モーヒ　ブスヌ　「ユーニャー」マデ「ナ」　ケシ！「タル」ハズ。
いま火が燃えているけど、夕方までに消してあると思う。

現在テンスでも同様に結果の継続をあらわすことができる。このばあい基準時は発話時＝現在である。

(34) タ「ロー」　ダイコン　イッ「パイ」キ！　「シダルラ」ー。
太郎、大根をたくさん切ってあるなあ。

(35) ミナ」グル　「ヨ」　シ！プリ「ダル」ヨ。
いまごろね、ずぶ濡れになってあるはずだよ。(子どもが出かけてまもなく大雨になったから。)

(36) マヤー「ドゥ」　ナ「セ」ル。
ネコが(子ネコを)生んである。(イヌではなくて。)

パーフェクトはこの形式の基本的な用法である。のこされた記録や痕跡、言語情報などから過去のできごとや存在を推論する。また、経験や想起の意味で使用される。つぎのさいごの2例は経験と想起の例であるが、はじめの例はあいてに反論する気持ちで使用し、あとの例はあいてにいわれてから思い出している。

(37) ク！ヌ「ピ！シンドゥ」　アチ！マ「レ」ル。
この日に集まってある。(過去の記録をみて。)

(38) ピ！トゥドゥ」　クヮナ　シ！「チェ」ル。
人がここに立ってある。(のこされた足跡から推測して。)

(39) タッ」カドゥ　ナラ「シェル」ハズ。
だれかが教えてあるようだ。(彼はそのことを知らなかったはずだが、口ぶりからどうもそれを知っているようだ。)

(40) クァナ」　アリ「ダ」ル。
ここにあったのだ。(いまはないが、設計図をみるかぎり、それが存在した場所はここでなければならない。)

(41) バー」　ニ「カイ」　ンギ「ダル」ヨ。
私、2回行ったことがあるよ。(このまえは行ったことがないといったじゃないか、といわれて、いやそんなことはないと反論する。行っ

たことで自分のなかに残っているなにかがある。)

(42) 「アー」ハー　バ「ヌン」　フェー「ダ」ル。「ミナ」　ウミダ「シャ」ン。
ああ、私も食べてある。いま思い出した。(食べたことあっただろう？といわれての想起。)

例はすくないが、反復習慣の意味でも使用されることがある。

(43) ピーン」ピン　ロ「クジ」マデ「ナ」　オ「バー」サン　ヤ「ドゥ」　アヒ「ダ」ル。
毎日6時までにおばあさんが戸を開けてあるぞ。(疑われたことへの反論。)

反実仮想の用法についてはヌミル形でもふれたが、ヌミル形がなんらかの気持ちをこめて使用されるのに対して、ヌメル形では淡々と、とくに気持ちをこめないで使用される。

現在や過去の事実に反する仮定から結論をみちびきだすのがふつうであるが、あとの例のように予定された未来のできごとに反する仮定から結論をみちびきだすこともできる。なお、未来の反実仮想に過去形を使用することはできない。

(45) ミナ」　ク！ム「リ」　ブスヌ　「パ！リ」　ブ「レラ」　プ！「シ」　ミラリ「ダル」ハズ。
いま曇っているけど、晴れていたら星は見えていただろう。

(46) ウラ　ア「ツァ」マデ　ブ「レラ」　タロッ「ト」　アイ「ダル」ハズ。
あなた、あしたまでいたら、太郎と会っていただろう。(きょう帰るので太郎とは会えない。)

3.2. 過去形

過去テンスでは過去の基準時における結果の継続をあらわす。基準時以前に動作や変化が完成し、その結果の状態が存在している。さいごの例は存在動詞による経験の用法であるが、この形式ではモーダルな意味がつよくあらわれる。

(47) タッ」カドゥ　「トゥェー」ダ。
だれかが研いであった。(見たときには、きれいに研がれた包丁が目の前にあった。)

(48) パンチェダ」ヨ。
(さっき見たときに風で戸が)はずれてあったよ。

(49) マッ」ティ　ヌ「ミンギッサ「ミャン」ダスヌ　「ア」シヌ　ク！トゥアリ「ダ」ダ。
そこに飲みに行きたくなかったけど、そういうことがあった。(そこに行った、の意。良くも悪くも、ふつうではないことが例外的に何度かあった意味になる。)

過去形でもパーフェクトがこの形式に基本的な意味である。

(50) イヌ「ドゥ」　ア「ルヘ」ダヨ。
イヌが歩いてあったよ。(きのうイヌの足跡を見た。)

(51) キ！ヌ「メ」　イディ「ダダ」ヨ。
きのうは出てあったにちがいない。(外に出るなといっておいたのに、けさ靴が汚れていたことから。)

過去の反実仮想の用法ではテンスをえらばず、非過去形でも過去形でもおなじようにあらわすことができる。仮定条件節があるときはこの形式に、あとの例のように仮定条件節でなく〈もうすこしで〉という直前の意味ではヌム　マカヤダ(飲むところだった)になりやすい。

(52) タ「ロー　シ！キ　クン」ダスヌ　シ！「キ　キー　ブレラ」　バー「チャント」　ナラシ！「タダ」ヨ。
太郎、聞きに来なかったけど、聞きに来ていれば、私はちゃんと教え

ていたよ。

(53) モー「クンチャシ」 チ！カデ「ダ」ダ。
もうすこしでさわっていた。

4. ヌミ ブレル形

ヌミ ブ形のブにアリが融合したとみられる形式(ヌメル形)に、形式的には相当するが、ヌミ ブ形のもつ継続相の意味はない。この形式の過去形はヌミ ブレダ、ドゥ強調形はヌミドゥ ブレル、ヌミドゥ ブレダとなる。

動作や変化の結果や、ものの存在の、なんらかの痕跡や効力がのこされていて、それを根拠にそのできごとの存在を推論するのが基本である。第三者の会話などを根拠に推論することもある。このようにヌメル・ヌミダル形とおなじような意味で使用されるが、ヌメル・ヌミダル形よりも客観的な確かさの程度が低く、主観的な推論の性格がより強いようである。したがって、変化の結果などが明確に存在しているばあいや、問題となる動作をちょくせつ見ているばあいなどはヌメル形・ヌミダル形がえらばれやすい。

4.1. 非過去形

現在テンスでは現在の結果の継続に使用される。推論的な性格が強いため、直接的な結果がのこっている場面よりも、その痕跡やそう推論するなんらかの根拠がある場面で使用されやすいようである。

(54) アシ！キドゥ」 シ！「プリ」 ブ「レル」ヨ。
そうだから、ずぶ濡れになってあるよ。(子どもが出かけてまもなく大雨になったから。あれほど雨が降るから傘を持っていけといったのに、という気持ちで。)

(55) タイフー「シ」 キ！「シ」 ブ「レ」ル。
台風で切れてある。(切れたロープなどを見て。)

パーフェクトの用法では、記録や痕跡などからそのできごとの存在を推論したり、過去の記憶から想起したりするが、この形式は推論の性格が強いので、結果が明示されていたり、記録にのこっていたりしたばあいはヌメル・ヌミダル形がえらばれやすい。さいごの例は想起であるが、ヌミダル形の想起よりも感情をこめて使用される。なお、現在の痕跡などのばあい、過去形のヌミ ブレダでも可能だが、過去形にするとより遠い過去の痕跡というニュアンスがでるようである。

(56) ウヌ「ピ！シメ クァンドゥ」 アシ！ピ ブ「レ」ル。
その日はここで遊んである。(記録を見て。)

(57) ク！ゥナ パ！ラ アリ」 ブ「レ」ル。
ここに柱があったようだ。(むかしの設計図から、以前ここに柱のあったことがわかる。)

(58) マヤー「ドゥ」 フェー ブ「レベ」ー。
ネコが食べあるようだ。(食べた痕跡を見て。)

(59) ウヌピトゥ「ドゥ シ！ニ」 ブ「レ」ルヨ。
あの人が死んであるよ。(そうそう、思い出した、あの人が死んだんだった、という場面で。)

ここで、ヌメル・ヌミダル形との違いを再確認しておこう。たとえばウッ「チェ」ル(落としてある)は落ちている木の実を見て、あるいは記録を見て、より断定的に使用されるのに対して、ウッ「チ」ブ「レ」ル(落としてある)は、実はもうなくて、実が落ちたあとだけがあるのを見て、あるいは落とすのに使用したとみられる棒などを見て、より推量的に使用される。

この語形は反実仮想にも使用されるが、ヌメル形と同様、とくに気持ちがこめられることはない。また、ヌメル・ヌミダル形と同様に、過去や現在だけでなく、未来の予定についても仮想することができる。

(60) タロー「ミン」 ブットゥ ブ「レ」ル。
太郎もいたはずである。(あのときバスに遅れなかったら、いまみんなと一緒に。)

(61) チャン「ト」 シーブレ「ラ」 サン「ジ」マデ「ナ」 ウワリドゥ ブ「レ」ハズ。
ちゃんとやっていたら3時までにおわっていたはずである。(いまはまだ1時だが、手順が悪かったので間違いなく5時ぐらいまでかかってしまう。)

4.2. 過去形

過去テンスでは過去におけるパーフェクトの用法に使用される。過去に存在した痕跡などからそのできごとの存在を推論する。現在の痕跡をあらわすのに過去形は使用しにくいようだが、過去の痕跡のばあいは、非過去形にしても、とくに違いはないようである。

(62) キ！ヌヌ」 ピ！サン 「タロー」 チャン「プルー チ！クリ」 ブ「レダ」。
きのうの昼、太郎がチャンプルーを作ってあったようだ。(きのうの夕方、調理の痕跡を見た。)

(63) キ！ノー「ノ」 コクバン ヨ タロー「ドゥ」 ケシ ブレダ。クー「ドゥ チ！キ」 ブダ。
きのうの黒板ね、太郎が消したようだ。粉がついていた。(きのう太郎の服にチョークの粉がついていたことから。)

(64) ク！ゥナ パ！ラ アリ」 ブ「レ」ダハズ。
ここに柱があったようだがな。(むかしの設計図をみると。非過去の～ブレルなどと比較すると疑問に思っている感じが強い。)

過去形は過去の反実仮想にも使用される。この用法でも非過去形も過去形とおなじように使用することができる。

(65) バー シ！カ「サナッカ」ラ タ「ロー」 ケシ ブレダ。
私が教えなかったら、太郎、(黒板の字を)消していただろう。

(66) ア「ハリ」 ブ「レ」ダ。
明るくなっていたはずである。(停電だと思って電気のスイッチを入れなかったが、ただオフになっていただけだったので、もしもあのときスイッチを入れていたら、ちゃんと電気がついたはずである。)

注

1 動詞のヌミドゥル形と形態的におなじ形式が少数の形容詞語彙にみられるが、形容詞語彙ではその形式が基本形式となっている。アボッシドゥル(青い)、アハッシドゥル(赤い)など。なお、ドゥなし形はアボッシル、アハッシル。

2 大半の形容詞語彙が動詞のヌミダル形と形態的におなじ形式を基本形としている。そこには動詞との形態論的な連続性が強く見られるが、動詞の他の形式とは対立せず、その点で形容詞としての独自性はたもたれている。アウサダル(青っぽい)、カナサダル(かわいい・かなしい)など。なお、ドゥなし形はアウサル・アウサイ、カナサル・カナサイ。

参考文献

工藤真由美(編)(2004)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房

工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美(2007)「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『大阪大学大学院大学研究紀要』47

工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美(2007)「与論方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『国語と国文学』84–3 東京大学国語国文学会

島袋幸子・かりまたしげひさ(2009)「沖縄県今帰仁村謝名方言のアスペクト・テンス・ムード」『日本東洋文化論集』15号 琉球大学法文学部

金田章宏(2009)「八重山西表方言の形容詞」『国文学 解釈と鑑賞』74–7 ぎょうせい

資料は1997年の那根弘(なねひろし)氏(1911年生まれ)、2005年以降の前大用安(まえおようあん)氏(1924年生まれ)からの聞き取り調査によるものである。

本稿をなすにあたって科学研究費「南琉球西表方言文法の記述的研究」(課題番号20520406平成20～22年度、代表・金田章宏)および「南琉球方言の文法の基礎的研究」(課題番号20320066平成20～22年度、代表・狩俣繁久)の成果の一部を使用した。